

## 「一輪の花に如かず」

### マタイによる福音書6章28～30節

聖学院大学 大学チャプレン・キリスト教センター副所長 菊地 順

今日の聖書の箇所、主イエスは、「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」と語られています。この花とは、野に咲いている花のことです。野に咲いている花ですから、誰かに見ってもらうために咲いているわけではありません。わたしたちは、しばしば自然に咲いている花を見て美しいと感動し、花を愛でることがあります。おそらく、すべての生き物の中で、人間だけがこうした美しさ<sup>し</sup>に感動し、感嘆の言葉を語るのではないのでしょうか。その点から言えば、人間に見られることは、もし花々に人格があったならば、一番うれしいことになるかもしれません。しかし、花々は、人間に見られるために咲いているわけではありません。感動されるために咲いているわけではありません。むしろ、与えられた本性として、子孫を残す働きの一つとして、美しく咲いているに過ぎないのです。しかし、その美しさは、完璧であると言えるのではないのでしょうか。美しいという言葉が、そのまま当てはまるのです。しかも、今日の聖書に記されているように、花は、「働きもせず、紡ぎもしない」のです。人間が自分の生活を維持するために、野を耕したり、糸を紡いだりするようなことは、しないのです。与えられたままの環境の中で、与えられたままに育ち、そして美しく咲き誇るのです。しかも、完璧に咲き誇るのです。

主イエスは、この野の花を見つめられて、「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」と語られたのです。ソロモンというのは、イスラエル王国の第3代目の王です。紀元前10世紀に、父ダビデ王と共に、イスラエルの黄金時代を築いた人です。今、聖学院教会の祈祷会では、毎週旧約聖書の列王記を読んでいます。そこには、このソロモン王のことが記されています。そして、その栄華のことも、詳しく語られています。それによると、たとえば、ソロモン王の一日の食糧は、「細かい小麦30コル、荒い小麦60コル、肥えた牛10頭、牧場の牛20頭、羊100頭で、そのほかに雄じか、かもしか、こじか、および肥えた鳥があった」(列王上4:22-23)と記されています。これは、ソロモンの宮殿を支えた一日の食糧を記したのですが、それにしても、それは膨大な量であったことが分かります。また、その軍事力についても、「戦車の馬の、うまや4千と、騎兵1万2千を持っていた」(同26)とあります。またソロモンは、壮大な神殿や王宮を建設しました。さらに、ソロモンは知者としても知られた人で、「多くの知恵」を持っていました。聖書には、ソロモンは「箴言3千を説いた。またその歌は1千5百首あった」(同31)と記されています。そのように、ソロモンは、人間的にも、王としても、大変優れた人で、その治世は栄華に満ちたものであったのです。しかし、主イエスは、この「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」と語ら

れたのです。それは、なぜでしょうか。

一つには、ソロモンの栄華は、100 パーセント、手放しで称賛できるものではなかったことにあるのではないかと思います。ソロモンが王になるまでに、イスラエルでは多くの血が流されました。ソロモン自身も、自分が王になるために、兄弟を一人、部下に命じて殺害しています。そして、それ以外にも、多くの命を奪いました。そのため、王としてのソロモンの背後には、憎しみ、怒り、悲しみ、憂いといった、さまざまな人間の思いが渦巻いていたのです。またソロモンが建てた神殿や王宮は、その栄華を象徴するものでしたが、しかし、その背後には、多くの税金をかけられて苦しめられた人々や、厳しい労働を強いられた労働者や奴隷たちがいました。そのため、その栄華の背後には、重苦しい影が立ち込めていたのです。ですから、ソロモンの栄華は、手放しに、「美しい」と称賛できるものではなかったのです。

それに対し、野に咲く花は、手放しで「美しい」と言えるのではないのでしょうか。そこには、争い合う醜さはありません。自分の美しさを実現するために、他を蹴落とすということはありません。またそこには、自分の美しさを誇るという醜さありません。また逆に、他の花の美しさを妬むという醜さありません。一つ一つの花が自分に満足して咲いています。しかも、咲くべき花として、完璧に咲いています。野のユリは野のユリとして、完璧に咲いています。半分しかユリになっていないということはありません。咲くように授かっている花に、100 パーセント、なっています。だから、花は、美しいのではないのでしょうか。見た目が美しいだけでなく、その存在が美しいのではないのでしょうか。だからこそ、主イエスは、「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」、「一輪の花に如かず」と語られたのです。

ところで、今日の聖書の話で大切なことは、ソロモンの栄華と野に咲く一輪の花の比較だけではありません。もっと大切なことは、「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」と言われている野の花よりも、あなたがた人間は、もっと恵まれているということなのです。神の恵みが注がれているということなのです。今日の聖書の箇所では、主イエスは、「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくして下さらないはずがあるろうか」と語られています。主イエスは、神は、「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる」野の花よりも、人間一人ひとりの方を、よりよく扱って下さると言うのです。もっと心を砕き、もっと必要なものを持って支え導いて下さると言うのです。それは、人間は神に似せて造られた存在として、一輪の花よりもはるかに優れた存在であるからです。だから、神の恵みは、野の花に優って、豊かに注がれていると言うのです。そして、だからこそ、思い煩うなと教えられます。

しかし、わたしたちの実際の生活は、どうでしょうか。野の花よりもはるかに優れたものとして、神の恵みを豊かに反映した歩みとなっているのでしょうか。野の花のように、自分であることに満足して、生きているのでしょうか。おそらく、実際は、その逆であるように思います。主イエスの、「だから思い煩ってはならない」という教えとは全く逆に、いろいろと思い煩う中に生きているのではないのでしょうか。主イエスは、「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな」と語られています。しかし、わたしちは、日々思い煩うのではないのでしょうか。何を

食べようか、何を着ようかと、思い煩うのではないのでしょうか。また、これがほしい、あれが必要だ、こうでなければいけない、とあって、思い煩うのではないのでしょうか。そして、そうした思い煩いの中で、神から受けている恵みを見失っているのではないのでしょうか。

わたしは今週誕生日を迎えました。また一年歳を加えることになりましたが、歳を重ねることの中で思うことの一つは、わたしたちには、生きていくうえで必要なことは、十分与えられているということです。わたしもいろいろな思い煩いを持って生きてきました。特に若い時はその思いが強かったと思います。しかし、今振り返ってみると、必要なものは、自分が求める前に、すでに与えられていた、あるいは備えられていたという思いを深めています。そして、逆に、自分のさまざまな思い煩いが、かえって、そうした恵みを見失うことになっていたと思うのです。それは、親子の関係に似ていると思います。親は、子供に必要なものをいろいろ配慮するものです。たとえば、食べ物でも、体にいいものをバランスよく与えたいと思います。しかし、野菜が嫌いな子供は、それを食べません。食べないどころか、それを勧める親をわずらわしく思います。そして、自分の食べたいものを要求し、それがないと文句を言います。十分な食べ物があり、十分な配慮のある中で、そうしたいざこざが起こるのです。そうしたことが、わたしたちの人生のいたるところで起こっているのではないのでしょうか。そして、自分が自分として、本当には花開いていないのではないのでしょうか。

主イエスは、野の花を見よとおっしゃいました。そこに注がれている神の恵みを見よと語られました。そしてまた、そのあり方にも注目せよ、と語られました。それは、与えられたものに満足し、他者を蹴落とすこともせず、また他者に対して自分を誇ることも、卑屈になることも、また妬むこともしない、そうしたあり方です。そして、ユリであればユリの花として、完璧に咲き誇っているのです。自分が自分として、100パーセント生きているのです。わたしたちも、そう生きるべきなのではないのでしょうか。自分という与えられた存在を、100パーセント生きることが大切なのではないのでしょうか。そして、もし、それができないとなるならば、それは、ソロモンの栄華とは別の意味で、野の花の一輪にも劣る人生となってしまうのではないのでしょうか。わたしたちは、謙虚に自分自身を振り返り、自分に与えられている大きな恵みをしっかりと見つめながら、それを感謝しつつ歩んでいくことが大切なのです。そして、それ以上に、その恵みを注いでくださっている神を見上げて歩むことが大切なのです。思い煩うのではなく、神に信頼する中であって、わたしたちは神の恵みから、さらに神の恵みへと生かされていくのです。

春学期も締めくくりの時を迎えようとしています。4年生は就職活動の真っただ中だと思います。いろいろ思い煩いが生じる時だと思います。しかし、神に信頼する中であって、自分を見失うことなく、一つ一つ目標に向かって進んで行きたいと思います。

2012年7月4日 聖学院大学 全学礼拝